

第十一回宗教法学会・報告

国家神道

——伊勢神宮と靖国神社を中心に——

村上重良

(慶應義塾大学)

国家神道の問題は、今日の日本の政治・文化・宗教の問題として重要なテーマであり、また社会的関心も大きなものがあります。ここでは、国家神道の特質に焦点を当てて、国家神道を支えていた、二つの巨大な支柱としての伊勢神宮と靖国神社の問題に及びたいと考えています。初めに若干、言葉の説明をしておく必要があると思いますが、国家神道という用語が一般的に用いられるのは、終戦後のことです。戦前にも国家的神道という言い方がありましたが、一般的ではありません。戦後この言葉が一般化するきっかけになったのは、占領当初、敗戦の年の十二月十五日に出た、いわゆる神道指令です。その中の State Shinto の訳語として、国家神道が登場します。この State Shinto という言葉は、戦争中から、アメリカの日本研究者の間でごく普通に使われていたようですが、その訳語として国家神道が登場する訳です。その後、この言葉が戦前の国家と結びついた神道の総称として用いられるようになりました。

それでは、宗教学と一般的な意味を含めて、国家神道とはどういう範囲を指すか、ということに及びたいと思います。先ず定義的な言い方をしますと、国家神道とは近代天皇制国家の国家宗教である、と言えらると思ひます。

もう少し具体的に言いますと、日本の伝統的な宗教の一つである神社の宗教、神社神道を国家が全面的に掌握し、皇室神道と結びつけて国家宗教とした、ということになります。この点については、神社神道および皇室神道とは、歴史的にどういふものであるかを見なければなりません。それは後に触れることにします。国家神道の出発点は、いうまでもなく一八六八年（慶応四年、明治元年）の明治維新です。明治維新の王政復古の初めに、祭政一致、神祇官再興の布告が出まして、神道を国教化する基本路線が掲げられます。そして、変転を重ねますが、一貫して神社の宗教を公のものとして確立していく政策が採られます。つまり、神仏分離によって、仏教、儒教、陰陽道などと結びついた要素を、神社から除去する。そして、全神社を一元的にピラミッド型に編成して、その頂点に伊勢神宮を置く。伊勢神宮は、天皇の祖先神（皇祖神）の天照大神を、内宮（皇大神宮）に祀っていることから、天皇と一体化されます。こういう形で、神社神道が天皇の宗教的権威とつながるといふ構造をもっています。この天皇と神社を結びつけた新しい国家宗教を、国民に上から組織的に教え普及してゆく。これが大教宣布であり、国民教化政策といわれるものです。そのような地均しを経て、便宜上、明治・大正で申しますと、明治十年代に入って祭祀と宗教の分離という措置によって、神社神道を一般の宗教と別次元に置いて切り離し、非宗教という位置付けをします。この措置によって、国家神道の基本的な形が定まったと考えられます。この後、帝憲法の発布を経て明治後期から大正期を中心に、神社の制度面が詳細に拡充整備されます。これがいわば制度的な完成期というべきものです。このような過程を経て、いわゆる十五年戦争の時期には神道色が横溢し、国民に神社参拝の強制などが重くのしかかってくるという国家神道全盛の時代を迎える訳です。それが太平洋戦争の敗戦によって瓦解し、国家神道の禁止により、全神社が国家から切り離されて、民間の宗教として続くという形をとっています。この間七十数年の歴史がある訳ですが、これは、国家神道の形成、そして整備、その最盛期、

解体、という目まぐるしい歩みを続けます。

このような国家神道の特質、その構造、思想を見る上で、いくつかの見逃せないポイントがあります。その一つは、神社神道という宗教が持っている特徴です。宗教学の上で、宗教を様々な形で類型化することが行われますが、ごく普通に宗教としてイメージが浮かぶキリスト教とかイスラム教とか仏教のような代表的宗教は、宗教の類型の上では創唱宗教 *founded religion* といいます。これは、特定の創唱者、教祖があつて、その人に帰せられる教義、教理があり、その教えが、人種、国境、言語、習俗などの枠組みを越えて、全世界的に布教されるという構造を持っています。ですから、神とは、超越的な存在を広く指す訳ですが、普遍的な神を掲げ、布教によつて世界的に広がる構造を持った宗教が創唱宗教で、宗教の大小とは関係ありません。今日の世界では、有力な創唱宗教が地球の隅々までその教えを及ぼしています。まとまった社会的な宗教勢力を代表するものは、三大宗教と呼ばれる、キリスト教、イスラム教、仏教等の創唱宗教ですが、実は、歴史的に溯り、あるいは今日の世界でも、創唱宗教ではないタイプの宗教が広く見られます。創唱宗教は一般に古代社会において古代国家の没落期に生まれてくるという歴史的性格を持っていますが、それ以前にも、もちろん人類は宗教を持っていた訳です。そういう創唱宗教に先立つ宗教であり、そして、創唱宗教が全世界に広まった後も長く伝統を伝え、生き続けているタイプの宗教、それを民族宗教と呼んでいます。民族宗教は、ゲルマン民族とか大和民族という場合の民族という用語とは別の訳語です。民族学と呼ばれる学問がありますが、これは民族学が明らかにした類型の宗教という意味です。民族に当たる言葉は *ethnos* ですから *ethnic religion* と呼ぶ訳です。その訳語として、民族宗教を用います。民族宗教は、未開社会あるいは原始社会と呼ばれる、生産力の低い半閉鎖的な状態の小社会の宗教がモデルで、創唱宗教とは異なつた類型を成しています。その特徴は、特定の社会集団が社会集団として営む宗

教であるという点にあります。これは、創唱宗教が人間の内面的な問題を捉え、人々の信仰を集めることによつて宗教集団を大きくしていくのに対して、もともと成立している単位社会集団がそのまま宗教集団として機能するという特徴を持つ、集団ぐるみの宗教です。この宗教は、生産とその集団の存続、繁栄に関わる儀礼を主な機能としています。ですから端的に言えば、集団の宗教であつて、儀礼が中心であるということになります。民族宗教が掲げる神は、その集団限りの神です。例えば、日本の原始農耕社会について考えますと、その一つの単位である農耕集落が、集団を挙げて土地神を祭り、土地神がもたらす災いを予め押し止どめ、その力を自分たちの生産と生命の存続にプラスになるように願う、そういう祭りが中心になります。ですから民族宗教の行われている社会では、普遍的な価値をもつ絶対的存在の觀念はもととなく、その集団限りの神をその集団が挙げて信仰し祭るといふ形をとる訳です。このような宗教は、創唱宗教よりもさらに古いタイプであり、定型化した儀礼を誤りなく営み、子々孫々がそれを受け継ぐことに本領があります。人の内面に関わる教え、教義、教理のような領域は発達していませんし、また集団限りの神ですから、それを外に向かつて広め及ぼすということとは、本来意味を持たないことになります。つまり教義を本来は持つていないし、布教することがない、というのが特徴です。世界的に見ますと、創唱宗教が広がつていく、例えばヨーロッパがキリスト教化していくという言い方をします。これは、キリスト教化された側から言えば、そこに居たもともとの人、スラブ人であるとかケルト人であるとか、そういう人々が受け伝えてきた民族宗教ないしその発展した宗教が、キリスト教によつて呑み込まれてゆき、本来の骨組みを失つたということに他なりません。つまり創唱宗教による一元化が進むということは、民族宗教が解体していくことを意味します。世界の宗教を見ますと、そのような形で典型的に単一の宗教が支配的な地位を占めた、キリスト教圏、あるいはイスラム教圏、南方仏教圏のような地域もありますが、創唱宗教による単一化

が進まなかった地域も見られます。日本は、きわめて特別な歩みをした社会です。日本の場合には、古代に仏教、儒教、道教のようなアジア大陸の発達した宗教が伝えられますが、固有の民族宗教、これは原始神道から古代神道へと発展しますが、この神道は、それらと習合はしますが、完全にそれらに包摂されることなしに長く続きます。基本的には、地縁的あるいは血縁的な小さい社祠、氏神、鎮守、産土の類ですが、こういう土地と結びついた神社の宗教という形で、長く生き続ける訳です。逆に言えば、創唱宗教が並び栄え、一定の勢力を占めますけれども、それは一元的なものではなく、多元的な形で民衆の生活に根を下ろします。そして同時に、民族宗教の系統が、神社神道という形で個性を失わずに存続するという形をとります。ですから、日本の宗教の歴史的特徴は、宗教の多元的並存と、民族宗教の存続であるといえます。この両者は切り離れてあったのではなく、宗教が多元的に並存したために、それが完全に民族宗教の骨組みを溶かして包摂し、呑み込んでしまう力を持たなかった。逆にまた、民族宗教がその骨組みを保ち続けたために、単一の宗教による一元化が進まなかった。両者が互いに原因でありかつ結果であるような関係で、日本の宗教は幕末に至ったと考えられます。そして、明治維新の王政復古により、この宗教状況に一大変革が加えられました。天皇の親政を復古するということを掲げて成立した新政府は、成立早々、祭政一致、神祇官再興を布告します。つまり政治と神を祭ることは一体であるという古代的観念を改めて掲げる訳です。神社神道は、歴史的に見て、仏教と深く習合し、さらにはその教義、神道説といいますが、それを発展させる過程で、儒教、道教の観念を採り入れてきました。本来儀礼の宗教であって、教義を欠いていた神社神道は、宗教としての内容を他の宗教との習合によって自己形成してきた歴史があります。したがって神社の祭神にも、元々の天つ神、国つ神に加えて、仏教系、道教系の神々、あるいは人間の霊を祭る御霊信仰系などの新しい神々が登場します。何よりも先ず、神道は仏教と深く結びつき、日本の神々は普

遍的な真理である仏法を守る存在として、一般に受け入れられていた訳です。明治維新当初の神仏判然の命令によって、神社から仏教その他外来の宗教の要素を一掃するという措置がとられます。これは、奈良時代に始まる神仏習合の歴史を一変させる破天荒な出来事です。この神仏分離によって、歴史的に形成してきた内容を一応御破算にした全神社を、今度は政府の手で一元的に編成し直します。こうして国家神道の構造が基本的に決まります。

そこで国家神道の構造と特質のごく特徴的な点を述べたいと思います。先ず神社の制度面を、説明いたします。以下説明しますことは、制度としてはかなり長い期間、明治末から大正期あたりにかけて整えられたものを含んでいます。国家神道のいわば完成した形態がどういうものであったかという意味で紹介する訳です。先ず全国の神社は国家の宗祀であるということが掲げられます。宗祀とは、尊んで祀る所という意味ですが、要は国の祭りをする施設ということになります。そして、その頂点には、伊勢神宮が置かれます。これを本宗と呼びます。総本山のような意味です。神社は、幕末、明治維新の時点で、大小十九万社余りといわれていますが、明治後期に廃止、合併が進み、十二万社程に減ります。法的な位置では、神社は神社明細帳という、いわば公簿に記載され、営造物法人の扱いで国家の施設として位置付けられます。神社には、極めて巨大な有力神社から、巷の社、祠の類に至るまでありますが、これらの神社が何らかの意味で公の性格を認められ、その運営と施設の整備等、神社の尊厳を保つことに力が注がれた結果、多くの小神社の廃止、合併が行われ、だいたいの基準では、旧村にそれぞれ一ないし数社の神社があったものを、行政村に一社の割で整備していく方針がとられました。神社を中心に、その集落の住民が氏子崇敬者という形で結びつけられるという、神社中心主義がとられました。こういう大小の神社は、国によって格付けされました。本宗である伊勢神宮は正式には神宮といいますが、これは社格を

超えた特別な存在とされます。その下に官社といひまして、国家的な意義の大きい神社が、官幣社の大・中・小、国幣社の大・中・小、別格官幣社という社格で位置付けられます。官社は国家神道を代表する神社として重視されます。その下に諸社があり、地域的に有力なものは府県社となり、明治維新直後には郷社というランクもありましたが、後に消えます。その下に村社があり、それ以外の小神社は無格社とされます。この格付けは同時に、そこに奉仕する神職の身分と結びついています。神官神職という言葉がありますが、制度的に整った後は、神官とは伊勢神宮の神職を言います。これは官吏です。伊勢神宮には、祭主がありますが、これは皇族であり親任官で、天皇が自ら任命します。今日の認証官に当たります。そして大宮司が勅任官で、内務大臣の監督をうけるという構造になっています。一般神社については、官社および諸社に、それぞれ等級の違う神職が配置されています。宮司、禰宜、社司、社掌などいろいろな階級があります。これらは、その等級に応じた待遇官吏です、つまり、官吏としての待遇を受ける公の身分ということになります。経営面においては、神社の経営は、幕末までは主として神領・社領等といわれる所有地の収入と神社の社頭で得る収入、これは社頭収入とか社入金などといいます。社頭での売上げや御養銭の類とで賄われていた訳です。明治維新後、社領の上知という形で、神社の所有地は官収されます。神社の境内地は原則として国有地ですが、個々の神社の使用に供されるという形になります。社領は上知されましたが、国家神道の施設である大小の神社には、国としての経済的な支えが実現しました。これを、供進金制度といひます。官社(官幣社、国幣社)については、国費から供進金が出ます。つまり国が財政を支えます。諸社には、公費供進金制度といひまして、地方費が供進されます。これに社頭収入を加えたもので、神社の経営が成り立っています。こういう国費・公費の供進金は、神社によってその比率が様々ですが、大体一〇ないし二〇パーセントぐらいが賄われていたというのが大勢のようです。また、官社については、経営を確立

し、威厳を保つために、基本財産を設定して、その利子収入をもって経費の一部に当てることが制度化されています。このように、国家神道を支える神社、特に代表的な神社である官幣社、国幣社については、手厚い財政的な基礎設定が行われていた訳です。

次に神社の管轄の問題を見ますと、明治初年、神祇官が再興されます。これは、古代の律令制度に倣ったものです。この近代に復活した神祇官は、古代の神祇官とかなり趣きを異にしています。その管轄は、直接・間接様々な形ではありますが、全神社に及んでいます。古代の神祇制度では、特定の有力神社が神祇官とつながるという形をとりますが、近代の場合には、津々浦々の小神社に至るまで政府が掌握するという特徴があります。もう一つ、古代にはなかった、宣教を監すという職掌が掲げられています。宣教とは教えを宣べる、という意味で、明治維新当初には、天皇を中心とする国体の教え、神社の崇敬を基礎付ける宗教教義を大教と呼んでいます。これは、当時の神道は神仏習合の神道が主であったので、それとの違いを強調するために特に大教と呼んだものと思われます。この教えを国民に布教してゆく仕事が、宣教です。国民教化という言い方もされていますが、この宣教が神祇官の仕事として重視されました。その後、神仏合併布教、そして大教院の廃止という変転を経て、このコースが切り変わり、やがて祭祀と宗教の分離ということで、神社神道は一般宗教と切り離される訳ですが、明治十年代以後は神社は内務省の管轄となります。内務省は戦前の国内統治に中心的役割を果たした中央官衙ですが、その主要な仕事は地方行政と警察行政と神社行政でした。ただし大正初期までは、宗教行政をも含めていました。宗教行政は大正二年に文部省に移管されます。戦前には、神社行政は一貫して、内務省の管轄事項となつていました。内務省神社局がそれに当たりました。神社行政については、神職による神祇に関する中央官衙の復興運動があります。神祇官、神祇省とあつた中央官衙が消滅したのを復活させようとする根強い運動があつた訳

ですが、これは、紀元二千六百年を期して、内務省の外局として神祇院が設立され、一応その目的を達しました。十五年戦争の最終段階では、神祇院が神社行政を管轄していました。そして、国家神道は宗教ではないという建前で、一般の宗教、特に神道系の宗教と区別されます。神道系宗教は、教派神道という名で編成されて行きます。この国家神道を大前提として、その枠内で神仏基(教派神道、仏教、キリスト教)の三グループの宗教がその活動を認められます。これが国家神道体制と呼ぶ戦前の宗教体制の基本的な形です。神社非宗教ということは、政府の建前、公の立場です。また同時に、公認宗教は存在しないというのも、政府の建前、公の立場でしたが、神仏基三教は、その代表者が勅任官待遇を受けていたことから明らかに、公の性格を帯びた事実上の公認宗教であったといえます。このような位置付けは、歴史的に辿ってみますと、国家神道を大日本帝国の国体に発するものとして、国家宗教化した訳です。しかし神社は、当然のこととして他の一般の宗教と競合する部分を持つています。そのために、原則として神社神道は宗教活動を行わない、という制約を付けた上で、一般宗教とは異なる非宗教で宗教を越えたものである、という位置付けをして、帝国憲法二十八条の信教の自由の保障との矛盾を回避したと考えられます。帝国憲法で掲げられる信教の自由の規定は、基本的には、明治初年のキリシタン禁制の高札撤去以来の姿勢に基づくものであり、国民の信仰を権利として尊重するという発想から出たものではありません。文明開化、富国強兵を急ぐ新政府にとつて、欧米のキリスト教の国々への外交上の配慮と、不平等条約改正による国権の確立という至上命令のために、日本において信教は自由である、と特に強調する必要があったという歴史的事情があります。信教の自由という言葉は掲げられていますが、その大前提として国家神道の強制があったという構造になっています。

次に、国家神道は何を行い、何を説いていたのかという、祭祀と教義を説明いたします。神社は、祭祀をする

施設です。それでは、国家神道下の神社はどういう祭祀をしていたかといいますと、伊勢神宮については別に述べますが、一般神社については、内務省が神社祭式を定めています。それは、皇室で行われる祭祀を基準として、神社の祭祀を編成したものと いえます。国家神道の下においては、神社の祭祀も国によって画一化され、その基準となったものは宮中の皇室神道の祭りであるという特徴があります。ですからその意味でも、全国の神社には天皇の宗教的権威が貫徹していたと言えます。神社はどういう教えを掲げていたかといいますと、神道は宗教ではなく教義はないという建前でしたが、実は強烈な宗教イデオロギーを掲げています。端的に言えば、明治維新以来の国家の基本的な姿勢である祭政一致を形に表わしたものが神社である、ということになります。神社への崇敬は、そのまま現人神天皇への崇拜とつながっていく構造になっています。天照大神から連綿と続く万世一系の天皇が統治する万邦無比の日本の国の賛美、いわゆる国体の教義が神社の教義に当たります。さらにこの天皇の御稜威を広く全世界に及ぼすことが、日本人の尊い使命であるという八紘一宇の教義が掲げられた訳です。これだけの大々的な制度を持ち、祭祀を通じて国民との結びつきを深めた国家神道ですが、法的にはどういう根拠を持つていたかといいますと、まことに意外なことですが、ことさらに法的に根拠付けるものはないという感じだと思います。戦前、神社法制定の要求がありました。結局、神社法という形では実りませんでした。それではなぜ神社が国の祭祀の施設として通用したのかと言いますと、明治四年五月十四日の太政官が神職、社家の世襲を廃する際の布告の冒頭に「神社の儀は、国家の宗祀にして一人一家の私有すべきに在らざるは、もちろんの事に候所」云々、とあるのを根拠としていたからです。神社というものは、国家が尊んで祭るところのものだという意味の布告の言葉の根拠とし、帝国憲法発布後は、これをその七十六条一項の憲法や法律に矛盾しない現行の法令類は有効という理由規定を援用して、有効であると見なしていたと考えられます。このように法的根拠は

非常に弱いのですが、実際の神社の運用では、神宮については主として勅令で、一般神社については、内務省令でその都度規則等を定めてきた、という形をとっています。

それでは、伊勢神宮と靖国神社は、国家神道でどういう役割を果たしたかという問題を最後に述べたいと思います。まず伊勢神宮ですが、これは、全神社の本宗として位置付けられています。伊勢神宮は日本有数の古い神社です。古さでは出雲大社の方が古いと思われませんが、それに次ぐ古社であり、古代において国家の最高神、皇室の祖先神を祭る神社として確立した訳です。古代国家の没落後、次第に民衆の間にその信仰が広まって、江戸時代には現世利益神の性格が強くなりました。しかし、その位置は神社の中では抜群で、幕府が与えた朱印領のみでも四万二千石という広大な社領を擁しています。明治維新後、明治四年に神社の本宗と定められ、直ちに神祇官が改革を断行します。これを神宮御改正といっています。この時に、天照大神を祭る内宮を外宮より上位に置くことが初めて確定します。内・外宮対等というのが伝統なのですが、内宮を上位とします。そして、御師その他による暦や大麻などの製作と販布などの要素を切り捨てるといふ措置をとって、いわば国家神道の至聖所として、厳かなものに作り変えました。伊勢神宮の祭祀は、皇室祭祀と一体であるということが強調されます。また皇室祭祀の編成の上では、明治四年に神宮改革が成りますと、その年の九月から、伊勢神宮の収穫祭に当たる神嘗祭を皇室神道の大祭に加えています。このように、皇室神道と伊勢神宮は、直結しています。そして国庫の共進は、例えば大正九年で二十万円という巨額が支出されています。このように、歴史の極めて古い神社を国家神道の柱として整備し、多額の国費を注ぎ込み、特に二十年ごとの遷宮は回を追うごとに大規模化しました。こういう整備によって、伊勢神宮が国家神道の中心として確立されていくことになります。

歴史的に古い悠遠な歩みを続けてきた神社が、改めて国家神道の総本山に据えられたということになる訳です

が、それと同時に、政府は国家神道のもう一つの新しい支柱として、靖国神社を作りました。これは天皇制の特質の一つと思いますが、極度に古いものと極く新しいものをあえて組み合わせることで、きわめてフレキシブルな存在形態をとります。国家神道もその延長線上にある訳で、最も古い伊勢神宮と、新たに作った靖国神社を支柱として、国民の間に根を下ろしていくという形をとっています。靖国神社については、今日盛んに論議がありますが、国家神道の神社というものが、天皇と神社を直結することで基本的な性格ができています。靖国神社はもう一つ軍という要素があり、天皇・軍・神社を一体化した宗教施設であるといえると思います。靖国神社は、軍の施設であり、明治天皇の意志で東京招魂社として創建される訳ですが、この創建に当たって、天皇の軍隊を作っていく一環として大きな力が注がれます。例えば、その運営のために社領一万石を与えています。朱印領を比較してみますと、一万石以上というのは、江戸時代には、伊勢神宮と春日大社、日光東照宮の三社のみで、東照宮は同じ一万石です。ですから、いかに新しく作った東京招魂社が重要な意味をもつものとして捉えられていたかがわかります。そして、明治七年には、東京招魂社に明治天皇が自ら参拝しています。これは天皇の神社参拝、特に臣民を祀った神社への参拝として異例中の異例で、いかに東京招魂社、後の靖国神社を重んじていたかを示しています。この招魂社が西南戦争後、神社に改められ、靖国神社という名称になり、別格官幣社に列せられ、軍の管理下で戦争ごとに戦没者を合祀して拡大し、敗戦を迎えたことは、今日指摘され論じられている通りです。

伊勢神宮と靖国神社という巨大な支柱に支えられて、国家神道はその機能を発揮しました。その基本は天皇崇拜と軍国主義であったといえます。国家神道の基礎にあるものは、民族宗教が本来持っている集団中心主義であり、価値の基準を集団の枠内に置く、エスノセントリズムです。この集団の原理が、日本という近代化する国の

国家大にそのまま拡大され機能していた、ということになると思います。